法宝撰『一乗仏性究竟論』の研究

小野嶋祥雄

1、本論文の目次

課程博士の学位審査論文の要旨を述べるに先立ち、以下に目次を挙げる。

序　論
第一章　法宝撰『一乗仏性究竟論』とは
第一節　三一権実論争史の中の『一乗仏性究竟論』
第二節　『一乗仏性究竟論』の著者法宝について
第三節　『一乗仏性究竟論』の構成
第二章　研究の回顧と課題
第三章　本論文の大綱
本　論
第一章　初唐期の三一権実論争における『一乗仏性究竟論』の位置
第一節　問題の所在
第二節　『一乗仏性究竟論』と霊潤「十四門義」との関係
第一項　霊潤「十四門義」の概略
第二項　霊潤「十四門義」と『一乗仏性究竟論』との関係
第三節　『一乗仏性究竟論』の批判対象
第一項　『一乗仏性究竟論』の批判対象について
第二項　『一乗仏性究竟論』巻五「対妄通経章第十」の神泰説批判
小結
第二章　「真諦系一乗家の著作」としての『一乗仏性究竟論』
―初唐期の三一権実論争における玄奘三蔵系と真諦三蔵系教学の対立―
第一節　問題の所在
第二節　三一権実論争における真諦訳の真偽問題
第一項　徳一の真諦訳批判
第二項　『究竟論』に見られる真諦訳の真偽問題
第三節　『究竟論』における真諦訳経論の依用態度
第四節　『究竟論』における真諦説の依用態度
小結
第三章　「真諦系一乗家の著作」としての『一乗仏性究竟論』
第一節　問題の所在
第二節　『究竟論』に見られる北地仏教の学風
第三節　『究竟論』に見られる浄影寺慧遠説
小結
第四章　法宝と法蔵の著作間における一致について
―三一権実論争との関連において―

第一節　問題の所在
　第一項　法宝と法蔵の交渉
　第二項　法宝と法蔵の著作間に於ける交渉（従来の定説）
　第三項　従来説の再検討
第二節　法宝と法蔵の著作間における新たな一致箇所について
　第一項　『解深密経』第二の引用について
　第二項　『仁王般若経』の引用について
　第三項　『究竟論』と『五教章』における一闡提成仏の教証
第三節　三一権実論争との関連
　第一項　法宝と法蔵の著作間における依用関係
　第二項　霊潤『十四門義』との関連
　第三項　三一権実論争との関連
　小結
結論
資料研究
　法宝撰『一乗仏性究竟論』校訂テキスト

2、本論文の目的

唐初期の中国仏教界において、一部に成仏することが出来ない衆生が存在すると説く三乗真実説と、全ての衆生は成仏することが可能であると説く一乗真実説、そのどちらが真実の説であるのかをめぐって三一権実論争が繰り広げられたことは良く知られている所である。この論争の中、一乗真実・悉有仏性説の立場から、三乗真実・五性各別説を批判したのが、本論文が考察の対象とした、法宝（六二七―七〇三／七〇六年頃）の『一乗仏性究竟論』六巻（以下、『究竟論』と略）である。本書は、その草稿本と考えられる『一乗仏性権実論』三巻（以下、『権実論』と略）と共に、初唐期の三一権実論論争の中で一乗真実・悉有仏性説を主張した著作を代表するものである。

この『究竟論』に対する研究は、これまでにも既に、本書の文献学的問題や思想的特色、日本仏教における受容態度を明らかにする等といった研究が積み重ねられてきた。しかし、一九八六年に淺田正博氏によって『究竟論』巻一・二・四・五が石山寺より検出されるまで[1]、『究竟論』の全体像を窺い知ることが出来なかったこともあり、法宝の同時代の論師である慈恩大師基（六三二―六八二年）や法蔵（六四三―七一二年）の著作に対する研究に較べると、未だ検討すべき課題が残されている。その中で最も重要な検討課題は、『究竟論』を中国仏教教学史の中に位置付けることである。

なお、本書の教学的位置付けをめぐっては、学者の間に諸説が存在している。『究竟論』の著者である法宝は、賛寧撰『宋高僧伝』には「三蔵奘師学法之神足」[2]と記されているが、『究竟論』は玄奘とその門下が主張する三乗真実・五性各別説を批判することを目的とした著作であることから、その教学を玄奘門下のものと位置付けることは困難であろう。このため、伝記資料からではなく、『究竟論』自体に説かれる教学からの位置付けが試みられており、法宝の

五時教判が『涅槃経』を最高位に置くことから涅槃宗の論師とする布施浩岳氏の説や[3]、法宝と同時代の円測（六一三―六九六年）の『解深密経疏』巻四に、当時の三一権実論争の一乗真実・悉有仏性説を主張する側を指して「真諦等一類の諸師」[4]とすることから、『究竟論』を「真諦系一乗家の著作」とする説が根無一力氏によって提示されている[5]。このように、中国仏教教学史における『究竟論』の位置付けには、先学の研究に諸説が存在するが、本論文では、これらの問題について、『究竟論』に説かれる法宝の教学と、法宝に先行する中国仏教の諸師の著作や同時代の論師の著作との比較を通じて考察していくことを目的としている。

3、本論要旨

（1）初唐期の三一権実論争における『一乗仏性究竟論』の位置

本章では、『究竟論』が唐初期の三一権実論争の中で如何なる位置にあったのかを考察した。従来の定説では、唐初期の三一権実論争は、①霊潤（五八〇―六六七年頃）・義栄（生没年不詳）と神泰（生没年不詳）の論争、②法宝と慧沼（六四八―七一四年）の論争、という二つの論争系統があったとされるが[6]、『究竟論』の主張には霊潤の「十四門義」からの影響が認められ、また、『究竟論』中に神泰説を批判する箇所を検出することが出来たため、①霊潤・義栄と神泰の論争、②法宝と慧沼の論争、は一連の論争であることを指摘した。

『究竟論』に先立ち、一乗真実の立場から著された霊潤の「十四門論」は、第一門のみが伝教大師最澄（七六七―八二二年）の『法華秀句』中巻に引用されおり、その他の十三門については、その名目が挙げられているのみである。この「十四門義」と『究竟論』の関係については、「十四門義」の第二門「二乗之人入無余涅槃永不入大」と第三門「不定性声聞向大乗者延分段生行菩薩道」とは、その名称から二乗の廻小向大が論じられたものと推察することが可能であり、同じく二乗の廻小向大を論じた『究竟論』巻五「増寿変易章第九」との関係が問題となる。この点について、源信の『一乗要決』巻上には、『究竟論』巻五「増寿変易章第九」の冒頭箇所を引用し、「霊潤師の義も同じ」（『恵全』巻二・六一頁）と述べられていることから、両書の当該箇所の主張には内容的な類似があると推定した。

また、「十四門義」の第五門「一切諸仏修成功徳実有生滅」も『権実論』巻下の「釈外執難章第十」に対応箇所があることを指摘した。「十四門義」の第五門「一切諸仏修成功徳実有生滅」は、親光菩薩造・玄奘訳『仏地経論』巻三の記述に基づき、もし一切の有情がみな成仏すれば、済度される者が存在しないことになり、諸仏の功徳に尽きることがあることになってしまうという、三乗真実説を主張する側の論難であるが、これに同じ内容の議論が『権実論』巻下「釈外執難章第十」にも確認できるのである。つまり、『権実論』巻下「釈外執難章第十」は六つの論難より構成されているが、

その中の第四難「通仏功徳有尽難」が「十四門義」の第五門「一切諸仏修成功徳実有生滅」と対応するのである。

また、これまで『究竟論』の批判対象としては、慈恩大師基と円測が挙げられるのみであったが、『究竟論』巻五「対妄通経章第十」の第四段における三乗真実を主張する者の会通説は神泰の「一巻章」を批判し、同じく第十二段における「解深密師」の会通説も神泰の説を指すことを明らかにした。この神泰批判は、『究竟論』に先行する霊潤と神泰の論争の中で、霊潤の一乗義に対して神泰が批判を加える箇所であることから、『究竟論』には神泰の批判から霊潤の「十四門義」を救う側面があったと考えられることを明らかにした。

(2)「真諦系一乗家の著作」としての『一乗仏性究竟論』

―初唐期の三一権実論争における玄奘三蔵系と真諦三蔵系教学の対立―

第二章においては、唐初期の三一権実論争の対立の根底が如何なるものであったのかについて検討を加えた。

唐初期の三一権実論争については、玄奘三蔵の訳経に基づき三乗真実説を主張するグループと、真諦三蔵が翻訳した経論に基づき一乗真実説を主張したグループによる対立があったとする説が、根無一力氏によって提示されている。根無氏の主張は、法宝と同時代の円測の『解深密経疏』巻四に、三乗思想と一乗思想の論拠となる経論を挙げる中、五性各別説を主張する者を「大唐三蔵」を以て代表させ、悉有仏性説を主張する者を「真諦等の一類の諸師」と記していることを論拠としている。根無氏はこの記述に依拠して、『究竟論』を「真諦系一乗家の著作」であると結論付けているのである。

本章では、この根無氏の指摘について、円測の記述とは異なった視座から論証した。つまり、『究竟論』巻一「略述綱要章第二」、巻二「列経通義章第五」には、真諦訳『仏性論』に疑義を呈する三乗家に対して批判を加える記述が存在することに着目し、初唐期の三一権実論争においては、真諦訳『仏性論』の真偽をめぐる問題が存したことを明らかにした。先ず、『究竟論』巻一「略述綱要章第二」では、『仏性論』と『瑜伽師地論』の関係を述べる中で、ある者の弥勒菩薩は有性の論を破斥すると信じて、『仏性論』は真実の訳ではないとする見解が批判されている。また、巻二「列経通義章第五」では、『宝性論』巻三と『仏性論』巻二を一闡提成仏の教証として引用する中、『宝性論』巻三には『仏性論』巻二に同じく、一闡提の成仏を説く教えを了義とし、不成仏と説く教えを不了義とすると説かれることから、『仏性論』を偽とすることは出来ないとの批判が存するのである。『究竟論』に見られるこの『仏性論』の翻訳をめぐる真偽問題は、三乗真実を主張する論師が一乗真実を主張する論師の根底に真諦訳『仏性論』があると考えていたことを明らかにするものである。

また、本章では、『究竟論』における真諦訳経論・真諦三蔵説の

依用態度を検討し、法宝教学の基底には、真諦三蔵訳の経論・真諦三蔵説を重視するものであることを明らかにした。その中でも、真諦三蔵訳『仏性論』は、法宝の教判論である五時教判の論拠となっていることを指摘した。つまり、『究竟論』巻一「教時前後章第三」では教えに前後があるとする立場の論拠として『仏性論』が引用され、巻五「対妄通経章第十」では『仏性論』の論文が五時の論拠として引用されているのである。なお、法宝の『究竟論』における一乗真実説の主張と三乗真実説批判は、この五時教判を基盤としたものであるため、その教判論が『仏性論』に基づくものであることは、法宝と真諦三蔵訳の経論との密接な関係を示すものである。このように、『究竟論』にとって真諦三蔵訳の経論は、一乗真実・悉有仏性を説く上での重要な教証となっていることが明らかとなったが、霊潤の「十四門義」においても『仏性論』等の真諦訳を「甚深了義の理教」と位置付けていることもあり、『究竟論』に限らず当時の一乗真実説を主張する論師にとって、『仏性論』等の真諦訳経論がその主張の論拠となっていたであろうことを明らかにした。

以上の考察を以て、本章では、円測の『解深密経疏』巻四に、当時の一乗真実・悉有仏性説を主張する論師を「真諦等一類の諸師」と呼称することを論拠として、『究竟論』を「真諦系一乗家の著作」と位置付けた根無一力氏の指摘は穏当な解釈であると指摘した。

(3)「真諦系一乗家の著作」としての『一乗仏性究竟論』

第三章では、前章において確認した『究竟論』の真諦三蔵への依拠という問題を、法宝に先行する中国仏教諸師との教学の関係から考察した。

本章での考察は、『究竟論』を「真諦系一乗家の著作」と位置付けるにあたり、真諦三蔵と『究竟論』には時代的な隔たりがあることから、これらの隔たりを埋めることを目的としたものである。なお、本章では、『究竟論』と浄影寺慧遠（五二三―五九二年）の著作に文献学的一致が見られることを明らかとし、法宝の教学に浄影寺慧遠の影響が見られることを指摘した。

これまで、浄影寺慧遠と法宝の教学の関係については、法宝の『大般涅槃経疏』に「遠云」として、慧遠の『涅槃経義記』が引用されることが木村宣彰氏によって指摘されている。[7] このことから、法宝の教学には浄影寺慧遠の影響のあることが推察され、両者の著作を比較したところ、『究竟論』巻二「仏性同異章第七」に説かれる仏性説と、浄影寺慧遠の『涅槃経義記』・『大乗義章』巻一「仏性義」との間に一致が認められたのである。

つまり、『究竟論』と『涅槃経義記』には、仏性＝第一義空＝智慧ということが共通して説かれており、両書はその教証として『華厳経』『起信論』の同一箇所を引用している。なお、仏性の定義において『究竟論』が引用する『密厳経』は、慧遠の時代には未翻訳であり、『如来蔵経』についても、慧遠の『大乗義章』巻一「仏性義」の記述を『究竟論』が参照していたことが認められるのである。

また、『究竟論』と慧遠の著作の間には、仏性の定義の他にも、三因仏性と仏身の対配に於いて一致が見られた。『究竟論』巻三「仏性同異章第七」では、縁因と正因が報身仏の因、了因が法身仏の因となることが説かれ、『大乗義章』では、報身は生因（正因と縁因）の所生であり、法身は了因の所顕であると説かれており、『究竟論』と『大乗義章』では三因仏性と三身の対配に一致が見られることを指摘した。

本章では、以上の検討結果を踏まえて、浄影寺慧遠の教学こそが、真諦三蔵と『究竟論』との間を繋ぐものであると考えた。つまり、浄影寺慧遠の教学は『摂大乗論』や『大乗起信論』といった真諦三蔵訳の論書からの影響が色濃いものであることから、彼を「真諦系一乗家」と分類することはさほど無理のない見解であると思われる。そして、このように浄影寺慧遠の教学を位置付けることが可能であるならば、『究竟論』と慧遠の著作には一致が見られることから、真諦三蔵と『究竟論』との間を繋ぐ人物として浄影寺慧遠を考えることが出来るのである。

また、浄影寺慧遠を真諦三蔵と『究竟論』とを繋ぐ人物として考えることは、第一章の考察から得た、『究竟論』には三乗真実を主張した神泰の批判から一乗真実を主張した霊潤の義を救うという撰述目的があったとする考察結果にも重要な意義をもたらす。それはつまり、霊潤は慧遠の孫弟子に当たることから、真諦三蔵→慧遠→霊潤→法宝という思想的系譜が想定され、『究竟論』を中国仏教教学史に位置付けることが可能となるためである。

以上の第一章から第三章までの検討を通じて、『究竟論』の教学の系譜には、真諦三蔵→浄影寺慧遠→霊潤→法宝という思想的系譜が考えられることを指摘した。

（4）法宝と法蔵の著作間における一致について
―三一権実論争との関連において―

本論文の第一章から第三章までの検討は、真諦三蔵から法宝までの思想的系譜を縦の時間軸で考察したものであった。しかし、これのみでは、『究竟論』を中国仏教教学史に位置付けるには不十分である。つまり、第一章から第三までの検討には、法宝と同時代の論師との関係といった、横軸の視点が欠けているのである。そこで、第四章では、法宝と同時代の論師である法蔵に着目し、『究竟論』と法蔵の著作間の一致について検討を加えた。

なお、本章の検討結果から新たに明らかとなった点は、法蔵の著作と法宝の『究竟論』に見られる一致は、霊潤の「十四門義」と神泰の「一巻章」との論争を法蔵と法宝が共に参照した結果によることである。従来、法宝と法蔵の著作間における一致は、円測の『解深密経疏』からの影響や、法宝と法蔵の著作間の依用関係という観点から考えられてきた[8]。

しかしながら、『究竟論』と法蔵の『五教章』が一闡提成仏の教証として『宝性論』と『仏性論』を共通して引用するという一致に

ついて検討すると、同じ引用が霊潤の『十四門義』にも見られることが明らかとなった。また、従来より指摘されてきた一致箇所である『解深密経疏』巻四・『究竟論』巻二「列経通義章第五」・『探玄記』巻一「第三立教差別・第五明現伝」に一乗思想の教証として引用される『涅槃経』についても、その全てが霊潤の『十四門義』に引用されていることを確認することができた。以上のことから、法宝と法蔵の著作間における一致は、霊潤の『十四門義』と密接な関連を持つと考えてよく、それは即ち、法宝と法蔵の著作間における一致が霊潤の著作を共に参照した結果によるという側面を持つということである。

また、法宝と法蔵の著作間における一致は、『究竟論』巻五「対妄通経章第十」と『五教章』「種性義」の事例より分かる通り、霊潤の『十四門義』との関係のみでなく、神泰の「一巻章」とも関連するのである。このことから、法宝と法蔵の著作間における一致は、三一権実論争にて著された霊潤の『十四門義』と神泰の「一巻章」とを共に参照した結果によるものであると考えられるのである。

なお、こうした結果は、何も法宝と法蔵の著作間における一致を、円測の『解深密経疏』からの影響や、法宝と法蔵の著作間の依用関係から考えることを否定するものではなく、法宝と法蔵の著作間における一致は、従来より指摘されてきた、①円測の『解深密経疏』からの影響、②法宝と法蔵の著作間の依用関係、③三一権実論争との関連といった、複雑な要素より成り立っているものと考えられることを指摘した。また、『究竟論』と法蔵の著作に見られる一致が、霊潤と神泰の論争に起因することは、唐初期の三一権実論争では、それぞれの主張の論拠となる教証について、各々の論師の間である一定の共通認識があったことを示しているものと考えた。

4、本論文の結論

以上の考察結果によって、『究竟論』の教学は、根無一力氏が定義するように、「真諦系一乗家の著作」の教学として位置付けることが可能であることが明らかとなった。なお、『究竟論』を「真諦系一乗家の著作」と定義することは、法宝と同時代の円測が当時の一乗真実説を主張する論師を指して、「真諦等の一類の諸師」と記していることを直接の論拠とするものであったが、本論文の考察は、『究竟論』自体に見られる教学からも右の見解が首肯されるものであることを明らかにしたものである。また、本論文の中で指摘した通り、霊潤の「十四門義」と『究竟論』と法蔵の著作に一致が見られる等、唐初期の三一権実論争における一乗真実説を主張した論師の間には、その一乗真実説や悉有仏性説において、一定の共通認識が存在したことも明らかとなった。

註

① 淺田正博「法宝撰『一乗仏性究竟論』巻第四・第五の両巻について」(『仏教文化研究所紀要』二五、一九八六年)、同「石山寺所蔵『一乗仏性究竟論』巻第一・巻第二の検出について」(『龍谷大学論集』

四二九、一九八六年）参照。

② 賛寧撰『宋高僧伝』巻四・義解篇第二之一「唐京兆大慈恩寺法宝伝〈勝荘〉」（『大正蔵』巻五十・七二七上―中）

③ 布施浩岳『涅槃宗の研究 後篇』（一九四二年、叢文閣）

④『新卍続蔵』巻二一・二六八下―二七〇上

⑤ 根無一力「一乗仏性究竟論の撰述と時代的背景」（『叡山学院研究紀要』九号、一九八六年）

⑥ 常盤大定『佛性の研究』（一九三〇年、丙牛出版社）

⑦ 木村宣彰「法宝における涅槃経解釈の特質」（『大谷学報』五八巻一号、一九七八年）参照。

⑧ 吉津宜英『華厳一乗思想の研究』（一九九一年七月、大東出版社）